

システム理論と行為理論がとりうる関係性をめぐる論点整理と評価

—シンボリック・メディア現象と機能分化に着目して—

大阪医科大学 高橋顕也

1 背景と目的

本報告の背景にあるシステム理論 (Luhmann 1984) とフレーム選択モデル (Esser 2010) に代表される行為理論の論争は、ドイツ語圏では、社会学の統一性をめぐる J. ハーバーマスとルーマンとの 20 世紀の論争に取って代わるものと評価されている (Sutter 2006)。この論争をめぐっては、いずれかの優位性を説く立場と何らかの関係づけの可能性を説く立場に大きく別れる。しかし、後者の立場でも個々の争点についての論考にとどまっているものが大半であり、両理論の体系的な比較・関連づけを行おうとする試みに至っていない。本報告はこの論争状況に 1 つの体系的な視点を与えることによって論点を整理し、それぞれの立場を評価することを目的とする。その際、評価の基準を与える経験的対象としてシンボリック・メディア現象と機能分化に着目することにしたい。

2 結論

論点として、理論の基本的対象、基本的問題、方法論、および分析原理の 4 つの基礎的な理論構成要素、および両理論において共通する最も基礎的な概念の一つである意味概念をとりだすことができる。具体的には、i) 基本的対象：「コミュニケーション」と〈行為〉、基本的問題：「行為規定が成立する可能性の条件」と〈行為選択の規定因〉、ii) 方法論：「機能分析」と〈理解による因果的説明〉、iii) 分析原理：「システム合理性」と〈効用最大化〉、および iv) 意味概念：「差異性」と〈同一性〉である。

また、ルーマン理論においては、近現代社会の第一次的な分化構造は機能分化である。しかし、行為理論的アプローチとの関係を問う本報告の立場から言えば、この機能分化命題は、単に時代診断と機能分析のために前提とされるべきものであるのみならず、それ自体さらに探求されるべき問題である。その例として、「機能分化の再生産」の問題を挙げることができる。「近現代社会は機能分化社会である」という命題はシステム理論において中心的なマクロ社会学的判断であるが、フレーム選択モデルからすれば、機能分化とその再生産は原理上は行為者におけるフレーム選択の問題に変換されうるだろう。この場合、シンボリック・メディアは再生産メカニズムで中心的な役割を担う対象となり、機能システム水準でのシステム合理性と、行為者水準での効用最大化原理を結びつける位置に置かれることになる。「いかにして機能分化は再生産されているのか」という問いに答えることは、システム理論によって提起され機能主義的に精緻に分析されてきた問題領域に、行為理論によるさらなる深化の可能性をもちこむことになる。

文献

Esser, H., 2010, Das Modell der Frame-Selektion. Eine allgemeine Handlungstheorie für Sozialwissenschaften? G. Albert & S. Sigmund (Hg.), Soziologische Theorie kontrovers, VS Verlag, S. 45-62.

Luhmann, N., 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp.

Greshoff, R. & Schimank, U. (Hg.), 2006, *Integrative Sozialtheorie?: Esser - Luhmann - Weber*, VS Verlag.